

教科目名 環境計画 (Environmental Planning)

学科名・学年 : 土木工学科 5年

単位数など : 選択 1単位 (後期1コマ, 学習保証時間 22.5時間)

担当教官 : 亀野辰三

授業の概要		
<p>土木工学を学ぶ人にとって、「環境」に関する理解を深める必要性は他の分野の人たちよりも一層高いものがある。なぜなら、河川、産業廃棄物処理、道路、鉄道、港湾、橋梁などは、どれ一つとっても人間が活動する上で必要不可欠のインフラであるが、自然に直接手を下して構築するものであり、長期間にわたって環境に多大な影響を与え続けるからである。そのために、人間活動と自然あるいは地球環境をどのように調和させて事業を進めていくことができるかが、現在、厳しく問われているのである。「環境計画」が扱うフィールドは、もちろん環境問題であるが、わが国の高度成長期に「環境問題」は、大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音、振動、地盤沈下、悪臭といったいわゆる産業公害を指していた。しかし、今日の環境問題は、地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、砂漠化等という分類で捉えられている。環境問題の解決には、そのようなある枠内で捉えられる個別の現象だけではなく、自然環境に人間活動が働きかけることによってもたらされるさまざまな変化などを的確に捉える必要がある。したがって、環境計画では、人間活動を規定している政策、法律、社会経済、技術、ライフスタイルなどの幅広い視点から計画を検討し、それが環境に及ぼす複雑な影響を対象として考えることが重要である。</p> <p>以上の問題意識を踏まえ本講義では、最初に、地球環境問題を概観し、その後、「環境意識の向上が企業を変える」をテーマにして、企業活動と企業内での環境対策の現状を解説する。最後に、「誰が環境問題を解決するのか」をテーマに、社会とそのなかでの集団の動きや法的な社会規制のありかたを提示する予定である。</p>		
到達目標 <span style="float: right;">大分高専目標 (B2), JABEE 目標 (d1)</span>		
<p>(1) 環境問題の過去、現在を、その環境、政策、制度を通して現状認識ができる力を身に付ける。</p> <p>(2) 環境問題の解決に一市民として行動できる勇気を身につける。</p> <p>(3) 興味を抱く環境問題について、討論できる力を身につける。</p>		
回	授 業 項 目	内 容
1	1 地球環境問題を考える	第三段階を迎える人類の歴史、環境倫理学の原理、環境問題解決の実現性について学ぶ。
2	2 地球環境の危機状況をどう見るか	持続的成長の意義について学び、グローバル化の環境コストの考え方を理解する。
3	3 リサイクル社会がつくる循環型経済システム	消費型から循環型経済システムへの転換、家電リサイクル法、建設リサイクル法等の背景と現状について理解する。また、ライフサイクル・アセスメント (LCA) の考え方等を学ぶ。
4	4 環境破壊を事前に防ぐ環境アセスメント	環境アセスメントの歴史、環境アセスメントの仕組み、より効果的な環境アセスメントについて理解する。
5	5 グリーン革命を起こす ISO14001	世界標準の考え方、ISO9001 との違い、環境マネジメントが組織の活性化に貢献することを理解する。
6	6 21世紀の地域通貨エコマネー	地域通貨エコマネーの考え方と仕組み、エコマネーはなぜ受け入れられたのか? 日本各地の取り組みについて紹介する。
7	後期中間試験	
8	後期中間試験の解答と解説	自身の理解力を分析し、わからなかった部分を理解する。
9	7 地域社会の環境づくりを生かす「市民力」	環境問題を解決する主体は市民であることを理解する。また、コミュニティの崩壊と環境悪化は密接な関係にあることを学ぶ。
10	8 「地球益」時代の国際環境NGO	国際環境NGOの背景と活動の現状、NPOとNGOの相違、国際環境NGOが地球益に貢献することを理解する。
11	9 環境保全と経済成長は両立可能か?	経済成長と環境悪化の関係、戦後経済政策と環境政策、持続可能な発展、環境保全と経済成長との新たな関係構築について学ぶ。
12	10 新たな広がりを見せる環境法・規制	多様化する環境法、公害規制の基本的仕組みと手法、環境税、景観保護等について学ぶ。
13	11 総合討論	環境問題に関する自身の抱く課題を報告し、全員で討論する。
14	後期期末試験	
15	後期期末試験の解答と解説	自身の理解力を分析し、わからなかった部分を理解する。
履修上の注意	<p>(1) 環境問題は、現在最も解決を迫られている問題であるが、われわれの生活スタイルや価値観の変換を求められているとも考えられる。また、時事問題として取り上げられることが多いことから、日常的に新聞等のメディアに接し最新の情報を自ら取り入れる態度が必要である。</p> <p>(2) 配布するプリントは、授業を聞きながら大事な点を書き込んだり、問題を解いたりするのに使用するが、整理してファイリングしておくとうい。</p> <p>(3) 実力をつけるため、適宜レポート課題を出す。</p>	
教科書	加藤尚武編著、「スーパーゼミナール環境学」、東洋経済新報社。	
参考図書	嘉田・植田・山田編著、「共感する環境学」、ミネルヴァ書房。	
関連科目	都市計画、社会システム、景観デザイン、地域計画学	
評価方法	2回の定期試験の単純平均(70%)に、レポート課題(20%)、総合討論におけるプレゼンテーション(10%)により評価する。また、授業態度により、評価点からその20%を上限として減点する。	